



Title	第2回自然観察会の感想
Author(s)	辻村, 修一; 河村, 真梨子; 植田, 有策 他
Citation	臨床哲学のメチエ. 2007, 16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12307
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第二回自然観察会の感想

辻村 修一

2回目の観察会、散策の途中で風が吹き、木の葉が風に舞った。

どっどど どどうど どどうど どどう

青いくるみも吹きとばせ

すっばいかりんも吹きとばせ

どっどど どどうど どどうど どどう

『風の又三郎』を想起した。40年以上生きてきて初めての体験だった。

「本当の自然は存在しない」と思っていたが、前回の観察会でのカフェのテーマ（「本当の自然とは」「自然の怖さとは」）から国語史的に自然概念を整理し「自ら生成するものも自然概念に当てはまる」と思うようになった私にとって、今回の自然観察会は私を囲繞する人工物以外のものを全て自然のものとして観察することができた。

〈樹皮の感覚をオノマトペで表現する〉

散策の途中、樹皮をさわってオノマトペで表現するアトラクションを行った。オノマトペは身体感覚に近い言語であろうが、自分の感覚を言語化することの困難さを思い知らされる体験となった。ボキャブラリーの貧困さだけに起因

するのではないと思うのだが、その場で書き留めたオノマトペが、今樹皮に触れた感覚を上手く表現できているとは決して思えないし、その言葉を後に読み返してこの感覚を再現できるとも到底思えなかった。

もしも、樹皮の感覚を言語に定着させる作業を課せられたらオノマトペではなく、説明的な言語表現を選択するであろう私は、言葉によって自然を分節化する観察者としての立場でなく自然と関係を持つことができないのだろうか。

〈私〉と自然との〈遠さ〉ばかりでなく、〈私〉と〈私の身体〉との〈遠さ〉を実感させられたアトラクションだった。

〈音を線で描く〉

当日、京都パープルサンガとガンバ大阪の試合が行われていた。サポーターの応援の太鼓の音が聞こえてきたが、その音は記憶としてある映像を喚起した。また何種類かの小鳥の囀りが聞こえたが、知識としてあったヒヨドリ鳴き声だけは峻別することができた。ヒヨドリという言葉も映像を持っている。聴覚を特化させたアトラクションを体験することで、他の感覚より視覚が圧倒的に優位であることを再認識させられたことは興味深い体験となった。このように視覚の優位性を感じていたときの〈私〉は、自然の観察者としての〈私〉であったが、音を聞くことに没頭するにつれ、音を聞いている〈私〉、その音を絵にしている〈私〉、絵を描く色鉛筆の音を立てている〈私〉、その音を来ている〈私〉

と〈私〉が私から離れて、偏在しているような妙な感覚を感じていた。この感覚は前回の自然観察会で同様のアトラクションを行った時には感じなかった。ただ、前回の絵には絵を描く〈私〉が描き込まれていたの、同じような感覚を持っていたのかもしれない。

この後カフェで「何かと一体化するとは」というテーマで対話がなされたが、このような感覚が何かと一体化するという感覚のだろうか。日常では体験できない面白い感覚だった。

〈二回の観察会に参加して〉

私が単純なのかもしれないのだが、一回目も二回目も「変容」を経験し、日常の中でそのことを咀嚼し直すことすらあり、個人的にはとても面白い経験をする事ができた。

参加する前は少し気が重いのに帰宅するときには参加してよかったと思える。このような経験を参加者全てが獲得できるようにこれからも「自然観察会+カフェ」についての検証を重ね、作り上げる作業に参画したいと思っている。



観察メモをとる参加者たち

お誘いを受けて自然観察会へ足を運んだのは十一月も末の、低くたれ込めた雲が印象的な肌寒い日だった。参加者の中では、私は比較的自然観察会にも哲学カフェにも馴染みのない部類であろうと思われた。そのため少々緊張気味で集合場所に臨んだものの、自然観察という普段の自分にはあまり似つかわしくもないアクティブな響きと、中学校卒業以来久々の遠足気分を味わう機会から高揚していただけたかもしれない。

前半の自然観察会は、私が事前に抱いていた観察という言葉の学習的なイメージとは少し異なり、メインは「散策」に近かった。難しい専門知識や事前学習が要求されることもない。木の幹を見て、触ってその質感を言葉にしてみるなど、日常自分が「きれいだなあ」などと漠然と自然に対して思っている内実を少し深く見つめ直せるような時間だった。いくつかの木に触れながら、視覚と触覚は時に互いを裏切るような感じ方をするのはなぜだろう、と考えたりもした。こうやって色々と思いを起こさせるのも哲学カフェへの布石か？とも思ったが、それは後に哲学カフェが控えているというプレッシャーがあったためかもしれないし、普通自然観察会の参加者がそのように考えるかどうかは分からない。しかし哲学の諸問題に必ずしも引き付けなくても、自然に触れる機会を得た人が「哲学っぽい思考」を多かれ少なかれ、無意識のうちにしてしまうということは大いに考えられる。「哲学的思考」と書くのは何

だか気が引ける程度の、ちょっと普段とは違う視点を得て楽しむということをお願いのだが、それは意図的に組まれた企画手法に左右されるというよりは自然の方にそうしたものを呼び起こす力が含まれているのだろう。機会さえ与えられれば私達はいつでもそれに気づくことができる。要するに自然とは「哲学っぽい」？しかしそんなことは当たり前の気もするし、あまり哲学哲学と軽々しく口にすると、そもそもこの場合自然とは何ぞやと掘り下げなくてはならないような強迫観念にとらわれる。万博公園まで来てそんなことを考えるのも、とっていると、白鳥が見られるスポットに着いてはしゃいでいるうちにそんなことはすっかり忘れてしまった。

後半、哲学カフェでは自然を観察するというところを改めて見つめ直しながら、自然との一体化、自然の対象化など今日の振り返りにも直結するような対話が行われた。参加者の発言を聞きながら、自分が今日園内を歩きながら思ったことを整理することもできたと思う。観察会中に個人が抱いた考えを、帰路一人で振り返るだけではもったいない。

初めて万博記念公園を訪れたことも含め、色々楽しい思い出ができた日だった。しかし浅慮にも薄出のカットソーにニットを羽織っただけという格好だったため雨に降られてカフェの間に風邪をひきそうになった。部屋か学校に閉じこもりがちな生活では実感しにくい自然の脅威を身をもって知り、次回があれば季節と服装には注意して臨みたいと思う。

「自然には敵わないなからしかたがない」とはプロ野球が雨で中止になったときに、選手や監督がよくいう言葉でしょうか。彼らがぼやきながらベンチから引き上げていくイメージが、その時僕のあたまの中でくりひろげられていたかと思います。足下の悪い中歩き、屋根のあるところへ逃げのように走り、そして哲学カフェへ、という流れは当日のそれまでのどんなプログラムよりも自然（自然とは何か、はさておき）を感じさせるものでした。今日という日に対する自然界からの皮肉などと考えたりもしました。この自然はもろくもはかなくもなく、都会の隅においやられるわけでもなく、大きな顔をして靴下の中に侵入して、わたしの気分を左右させました。

思えばそれは自然観察会だから体験できたというわけではなく、日常の雨降りの日の一コマでもありえたことかもしれません。雲から滲むにぶい光や、風の音や、雨の色にも心奪われる、という気分になれるのはやはり自然観察会という特



別な一日であるからなのでしょうか。あるいは万博公園という緑豊かな場所であるからでしょうか。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。その時の哲学カフェは、自然とは何かがまた一段とわからなくなるいい機会になりましたが、僕にとってのなによりの収穫であったのは、平凡な日常からでも自然の豊かさはわいて出てくるということが再確認できたことでしょう。

自然観察会に参加する動機や考え方は様々あるでしょうが、この度の僕のように、ただ休日の退屈しのぎにというのもやはりありなのでしょう。少なくともあの日の僕はその心持ちがしっくりきたように思います。散歩をする時は、いろいろ何か考えたり別に考えなかったりしますが、何かそういう感じで僕は参加したいです。万博公園というちょっと奇妙な場所は、自然について深く考えさせられるという点で自然観察会に適しているのかもしれませんが。ただ難しいことはなんともいえませんが、お年寄りがのんびり歩いたり、家族が楽しそうに笑っていたり、冒険に向かうような子どもたちがいたり、・・・そんなことを見ることができてよかったです。きわめて普通の光景か。



自然観察会について語ろうと思えば、「自然」とは何か、「観察」とは何かを自明にしておくわけにはいかない。「私たち—観察する—自然」という関係性を問う。それとも、観察することの中で、いわゆる客体も主体も再吟味されるのかもしれない。だとすると、「観察する（私たち—自然）」と捉えるべきか。さらに、自然と接する中で私たちの主体はもちろん、観察するという行為なしし出来事自体が精錬されるのかもしれない。

知っている人も多いだろうが、ダニの世界は人間の世界とはまったく違う。第一目が見えない。執念深く何年でも樹上に潜む。通りかかる哺乳動物の気配をかぎつけ、落ちかかって皮膚から血を吸う。嗅覚と温覚と触覚だけでダニは生きている。

ダニの話をしたのは、環境をどう受けとめ、何を受け入れるかには種差があることを改めて確認したかったからだ。人間は多くを視覚に頼っている。もっとも、ほんとうに見えているのかどうか怪しいことも多い。毎日通りかかる街の隅々は私たちの目にしっかりと入っているか。社会的・文化的な決まりごと・約束事の景色をしか、私たちは見えていない。

だから、自然観察会では、「見れども見ず」の惰性を正し、自覚的に（注意を集中しつつ）自然と接するやり方を探るのだろう。もっとも、理屈をいえば、自然の美しいところに行き、注意を集中すること自体、非日常の行為であり、ある意

味で「不自然」である。「観察」とは対象化することではないのか。それで自然を本当に「感じ」、「体験」できるのか。自然観察会は或る種のフィクションを作り出そうとしているのではないか。まあ、それでもいいと私は思う。

自然観察会への参加は、初めての経験だった。木の肌を撫でて特徴をいう。これは難しかった。皮膚感覚が十分に鋭くないのだと思う。語彙（なめらか、ごつごつ、など）も致命的に不足している。それでも幹の凹凸を探り、どこで組織が乱れているかを見て、環境と折衝し、障害を乗り越えながら生長する木の「気持ち」に多少は迫れた。目を閉じて聞こえてくるものを「線」で描き分ける。この試みも悪くなかった。言葉以外のもので環境を表現してみるのは有効だろう。公園の乗り物の音、サッカー場から聞こえてくる歓声を聞き分けるのは、自然ではなく、文化ではないかとも思った。けれども、文化の産物も自然物と同等に聞き取り、「線」で表現できるというのであれば、それに同意する用意はある。

観察会後の呑み会も楽しかった。観察会における集中との落差は、仏教で言う「精進」と「精進落とし」の関係に似ているかもしれない。その意味では、今後もぜひ呑み会とワンセットで開催していただきたい。

